

年間第十四主日

2020.7.5

マタイ 11・25-30

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

「疲れた者、重荷を負うものは、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。福音書の中でも最も慰めに満ちた、イエスの招きのことばです。

今日の福音にはイエスのおことばだけが響いていて、弟子たちの姿も群集の姿もありません。それだけに、今日の福音のおことばは、福音書の枠を超えて、直接にわたしたちの心に響いてくるように思えます。イエスのこのおことばは、福音書の中の誰かというよりは、今このおことばを聴いているわたしたち一人ひとりに語りかけているように響いてきます。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。わたしたちのカトリック信者としての信仰は、わたしたちがこのイエスのおことばを、どこまで身をもって味わうことができるかどうかにかかっています。「わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるイエスとの出会いの経験なしに、そのイエスのもとで安らぎを味わう経験なしに、わたしたちの信仰は、疲れきった身と心に更に負わせられた重荷以外の何物でもなくなってしまうかもしれません。

「わたしのもとに来なさい」と呼びかけておられるイエスに応えるためには、幼子のようにならなければなりません。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい」と言われるイエスのおことばに魅力を感じつつも、このおことばに身を委ねることができないわたしたちがいます。心身に言いようのない疲労が蓄積しているのを感じつつも、背負い込んだ重荷を片時も降ろすことが出来ないわたしたちがいるからです。幼子のようになるためには、わたしたちはあまりにも大人になり過ぎてしまっているかもしれません。日々背負わなければならない重荷があるから、その重荷を背負うことで疲れきってしまっているわたしたちがいるから、イエスのもとに行くことが出来ない現実の中に、わたしたちはもがいていることのほうが多いかもしれません。

そのような現実を生きるわたしたちが、イエスの招きに応えることが出来るとすれば、それは、イエスの招きがわたしたちの心に届いているからです。わたしたちの信仰とはそのようなことです。そしてそれは、わたしたちの上に起こった奇跡のような出来事です。

今日の福音には、イエスの父なる神への喜びに満ちた賛美の声が響いています。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある

者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、これは御心に適うことでした」。イエスは、ご自分の招きに応える人々がいることに大きな喜びをもって父なる神に感謝しておられます。そのことによって、ご自分をわたしたちの現実の中にお遣わしになった父なる神のお望みが実現していることに感謝し、父なる神をほめたたえておられるのです。

わたしたちのカトリック信者としての信仰は、このようなイエスと父なる神の喜びに満ちたいのちの交わりの中に招き入れられるということです。父なる神のお望みは、わたしたちが御子イエスを信じる者となることであり、父なる神から遣わされた御子イエスの願いは、わたしたちが幼子のようになって父なる神を信じる者となることだからです。

日頃、このようなわたしたちを取り巻く大いなる脅威の中で日々生きる私たちがいます。そのようなわたしたちが、主イエスが示してくださる幼子のように、すべてを柔和で謙遜な心で受け入れることによって、静かにこの時を待つことにいたしましょう。いずれ神様がお望みになるわたしたちの未来が開かれることに、どこまでも希望を託して、力強く望みの内に生きていく恵みを願って、今日のミサをお捧げいたしましょう。